

松下幸之助記念志財団 研究助成
研究報告

(MS Word)

【氏名】

王 尊龍

【所属】(助成決定時)

立教大学大学院文学研究科

【研究題目】

琉球王国の近世化と漢学の展開

【研究の目的】(400字程度)

本研究では、日中両国のそれぞれを中心とする秩序体系の狭間に位置する琉球王国を対象に、琉球漢学の系譜を分析した上で、近世琉球の政治・外交・社会各領域における漢詩文の位置付けと役割を考察し、前近代東アジアの共通言語とも称されている漢詩・漢文が琉球社会に定着していく過程を明らかにすることを試みたい。こうした支配・被支配や開放・閉鎖という単純な歴史的流れに収まりきれない思想的・文化的動向への着目は、前近代東アジアにおける国際秩序のあり方を捉え直す、もう一つの視点を持つことになるだろう。さらに、「開放的」な古琉球から「閉鎖的」な近世へ移行するにつれて生じた思想・文化の変化を、琉球、日本(幕府・薩摩)、中国(明・清)の相互交渉という複雑な文脈の中で考察することは、現在進行しつつあるグローバル化の潮流変化をめぐる諸問題を理解する有力な手がかりを与えてくれると考えられる。

【研究の内容・方法】(800字程度)

1. 琉球人が作成した漢詩や漢文公文書に関する、アジア各地の諸文献に散在する記述を拾い集め、琉球王国の士族層において、漢学的教養の価値が普遍的なものとして認知される経緯を明らかにする。まず、漢詩文作成の技法、および政治交渉や国家儀礼など公的な場で詩文のやりとりを重んじる政治文化は、いつから琉球の士族層に浸透したかを考察する。その上で、漢学的教養の発生・展開と薩摩侵攻以降の琉球が置かれた国際的な環境との相関性を分析する。
2. 近世琉球の外交における漢詩文の役割を検討し、近世的な士族像が形成される背景を歴史的に精査する。具体的には、(1)清代中期から定例化された「使節献詩」(朝貢使節による応制詩の献上)という正月行事に焦点を当て、清を中心とする支配構造、およびそこから派生する外交構造が、いかなる形で運営されていたかを、政策執行の細部にわたって考察する。さらに、琉球使節による応制詩献上の実態を解明し、当時における琉清関係のあり方を再検討する。(2)中国との冊封・朝貢関係を維持するために必要不可欠な公文書である表文に焦点を当て、現存するすべての琉球表文を網羅的に収集し、琉球表文の様式変化を通時的に考察する。(3)対日外交について、「江戸立ち」に際して琉球使節が賦した「富士山」を主題とする一連の漢詩を取り上げ、その特徴を明らかにするを通して、江戸時代における琉日外交の一側面を明らかにすることを試みる。
3. 近世における琉球士族の漢詩文学習の全体像を解明する。具体的には、(1)「楚南家文書」や「林泉文庫」などの史料群から、漢詩文関係の記述を網羅的に抽出した上で分析を加え、近世士族の漢詩文学習・享受・利用にかかわる様態と変容を総合的に把握する。(2)久米村士族と福建の現地協力者との間で交わされた書簡を分析することを通じて、琉清両国間に介在する中間勢力たる様々な次元の社会集団の役割を考察する。その上で、前近代東アジアの「中国的世界」と「非中国世界」の間にどのような構造があり、それがどのように機能していたかを検討する。

【結論・考察】（４００字程度）

漢詩文の制作技法がエリートの教養として琉球の士族層に定着していく過程について、これまでは王府による積極的な「中国化」推進という文脈で説明されることが多かった。本研究では、琉球表文の様式変化や「使臣献詩」における琉球使節の行動など様々な事例を検討した。これにより、外交の最前線に携わる士族たちが、どのように現場の具体的な状況に合わせて対策を思案し、清側の意向を忖度した上で「同文の国」の形象に近づくよう自身の行動を規範していったかを考察した。さらに、こうした規範の形成過程において、北京の中央政府と琉球使節の間に介在する福州のローカルな文人たちが重要な役割を果たしたことを指摘した。このような重層的な権力関係の構造は、首里王府による上からの推進策と異なる形で、近世琉球の「中国化」を促す一因として作用していたのである。